様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ２９ 日現在

機関番号：１７４０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ２３３４２

研究課題名（和文）小学校における議論を展開する力の育成に向けた指導内容の整理と指導法の開発

研究課題名（英文）Examination of the contents and teaching methods of facilitation abilities at the elementary school level

研究代表者
北川　雅浩（Kitagawa, Masahiro）

熊本大学・大学院教育学研究科・准教授

研究者番号：１０８４６８６９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：小学校段階で議論を展開する力を育成するために、発達段階に応じた指導内容を検討し、実践方法の開発と検証を行った。未開発であった小学校低学年と中学年について、２事例ずつの実践方法を提供している。各発達段階で明らかになった内容をもとに、６年間を通した育成モデルとして整理した。議論を展開する力は下位能力として、展開スキル、メタ認知、プロセスに関する知識が含まれることを提言した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
学習におけるディスカッションの重要性が高まっているものの，国語科教育では，協同で考えを深め合うことを目的としたディスカッションの指導法についてはさらなる開発が求められる状況にある。特に，どのように議論を展開していけばよいかに焦点を当てた研究はほとんどなく，指導内容と指導方法の両面からの検討が求められる状況であった。本研究を通して発達段階に応じた指導内容と指導方法の要点を実証的方法で明らかにしたことは、話し合い指導のカリキュラムを作成する上での科学的根拠を提供する。また、指導者が実践開発の際に参考にすることで、児童の話し合う力を高めることに寄与することも期待される。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to examine a framework in developing facilitation abilities at the elementary school level. We examined the content of instruction according to developmental stages. Practical methods were developed and verified. Finally, it was organized as a model for development throughout the six years of elementary school. It was clarified that facilitation abilities include facilitation skills, metacognition, and knowledge of processes as sub-competencies.

研究分野：国語科教育

キーワード：話し合い　議論を展開する力　小学校

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９，Ｆ－１９－１，Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

学習におけるディスカッションの重要性が高まっているものの，国語科教育では，協同で考えを深め合うことを目的としたディスカッションの指導法についてはさらなる開発が求められる状況にある。特に，どのように議論を展開していけばよいかに焦点を当てた研究はほとんどなく，指導内容と指導方法の両面からの検討が求められる状況であった。加えて，小学校段階では，学年によってコミュニケーション発達の差が大きいため，実態に応じた育成モデルを考案する必要があると言える。しかしながら，議論を展開する力に関連する先行研究は，北川による小学校高学年を対象とした実証的研究に限られている状態であった(北川,2014:北川,2016:北川,2018A:北川,2018B)。北川によって提示された議論を展開する力を，より円滑に，多くの学級で児童が身に付けていくためには，それ以前の発達段階での指導内容と指導方法とを明らかにしていく必要があり，それらを整理することによって理論と実践とが往還された育成モデルを提案することができると判断した。

２．研究の目的

以上の背景から，本研究では，ディスカッションで議論を展開する力として育成すべき資質・能力と指導方法を，小学校６年間のそれぞれの発達段階に対応させながら明らかにすることを目的とすることとした。この目的を達成するためには，以下の３点の問いについて検討することが究明の足掛かりとなると考えた。

①議論を展開する力として，どのような思考力やスキル，知識が求められるか。
②どういった実践によって議論を展開する力を高めることが可能であるか。
③発達に応じた適切な配置や資質・能力相互の関連はどのようであるか。

本研究によってディスカッションにおける議論を展開する力の具体的な内容や指導方法を明らかにすることは，小学校国語科における「話すこと・聞くこと」領域の指導の充実に資するとともに，他教科での学び方を高める指導方法にも示唆を提供することができると考えた。

３．研究の方法

発達段階ごとの指導の要点を導出するためには，文献調査と臨床的調査とを合わせて検討した。文献調査はコミュニケーション能力の発達調査に関する先行研究や小学校を対象とした話し合い指導のカリキュラムが提示された先行研究を対象とした。臨床的調査は，東京都の公立小学校で実施した。話し合いの全体傾向を捉える際には発話をコーディングして量的な分析を実施し，発話内容の変化を捉える際にはトランスクリプトデータを質的に分析した。

指導法の開発は，東京都の公立小学校と国立大学附属小学校で実施した実践を対象とし，効果を検証した。検証方法は，上記と同様に混合的な方法を用いた。

指導の要点の導出，指導法の開発のいずれも低学年から実施し，中学年へと展開させていった。最終的には，これらを整理し，小学校６年間を対象とした議論展開力を育成するためのモデルを作成した。

４．研究成果

(1) 小学校低学年での指導内容の検討と指導方法の開発

小学校低学年段階の対話能力の発達課題は，発話を連鎖させることにあるとされる（山元,2016)。すなわち，自身が伝えたいことを発話するだけでなく，先行する発話や話し合いの流れを意識しながら，「話をつなぐ」ことを目指される。この「話をつなぐ」ことが，議論を展開する能力の基礎となると判断し，低学年児童が「話をつなぐ」ことができるようにするための指導内容を検討した。同一課題についての２年生と３年生の話し合いを比較分析した結果をもとに，低学年段階では「受け止め」「同意」「復唱」「問いかけ・質問」「メタ言語の使用」の使用を高めていく必要があること，「先取りする発話」を減らしていくことが要点であることを指摘した（北川,2020)。これらはいずれも「主体的に聞く」ことが基盤となるため，他の参加者の発言内容に関心を向けさせることがまずもって重要となることも併せて提言した。この調査は，「フラワーパス」と呼ぶアクティビティを開発して実施された（図１)。「フラワーパス」では一輪の花をトークオブジェクトとして活用し，観察児によってどのように渡っていったかが記録される。そのため，全員に渡るためにはどのような働きかけが大切かを考え，実行されることになる。「話をつなぐ」意識を高めるために有効な言語活動であることが確かめられた。さらに，調査結果の考察に基づき，低学年向けの対話のアクティビティ「ワンツー・タッチ」を開発した（図２)。これは児童が主体的に聞くことを促すために「復唱」をルールとして加えて，一往復の対話を継続させていく活動である。

以上のように，①「話をつなぐ」を議論展開力の基礎として位置付けたこと，②「話をつなぐ」ための下位要素となる低学年の指導の要点を明らかにしたこと，③それらの育成を促す低学年向けのアクティビティを具体的に開発したこと，が低学年を対象とした本研究の成果である。

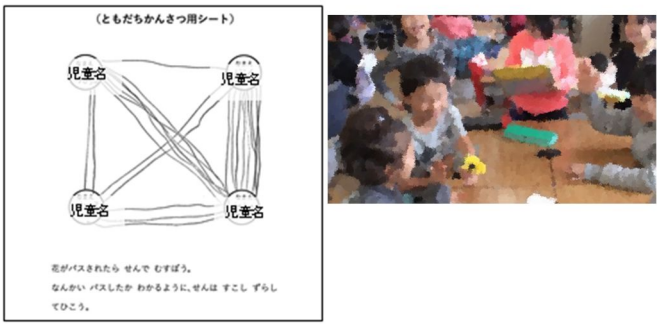

図1　開発した「フラワーパス」活動

図2　開発した「ワンツー・タッチ」活動

(2)　小学校中学年での指導内容の検討と指導方法の開発

(2)-１　先行研究，先行実践の分析を通した発達に応じた指導内容の検討

北川（2021）では，先行研究を整理し，中学年で重点を置くべき議論展開力を「目的を意識して進める」「共通点と相違点を見つける」「進め方の見通しをもつ」「全員の参加を促す」の４点に整理した。４年生を対象とした話し合い実践において，これらの働きかけがどのように表れていたかを臨床的に調査したところ，以下のことが明らかになった。

① ４年生段階でも，どのようなものを考えるかといった「枠組み」レベルの目的を意識し，それに即して意見を比較・検討できるようになる。
② 話し合い例を用いることで，話し合い全体の大きな見通しもって取り組むことができる。それぞれの局面においては，次にどう進めるかを見つけながら議論を進める様相が見られる。
③ 参加を促す程度のはたらきかけは中学年で定着が可能であり，議論の状況を見て誰に意見を求めるべきかまで考えることができるようになる，
④ 自分の意見に固執し論争的な状況に陥った状況ではいずれの働きかけも機能しなくなるため，自他の意見を「対象化」できることが要点となる。

(2)-２　先行実践からの指導の要点の導出

北川（2022）では，北川(2021)で扱った実践を対象に，子供たちが議論展開力を発揮する上で影響を及ぼした指導の手立てを導出した。整理すると下表の通りである。目的や進め方を意識しやすくする，モニタリングに取り組みやすくするための手立てを取り入れることが要点だといえる。また，論争的会話に陥らせないための配慮が必要であることが分かった。

指導の手立て	説明
話題の設定	・「枠組み」レベルの目的を含んだ話題を設定することで，目的を意識して話し合いを進めたり，意見を比較したりすることに影響する。 ・自分の思いが強くなり過ぎると，論争的会話に陥る場合がある。
話し合いプロセスの分割	・考えを広げる前段と，考えをまとめる後段とで授業時間を分けることにより，話し合いの進め方が単純化されどの子も方向を捉えやすくなる。
話し合いモデルを用いたモデリング	・モデルを示すことは，〈進め方の見通しをもつ〉だけでなく，〈目的を意識して進める〉や〈共通点と相違点を見つける〉の発揮に大きく影響する。 ・モデルを示しても、全てモデルの通りに進めるのではなく，局面でのやりとりは主体的に展開される。
話し合いの可視化シートの活用（図３）	・話し合いシートに，話し合いの目的を示しておくことでモニタリングが行われやすくなる。 ・付箋紙や書き込みによって共通点や相違点の検討に取り組みやすくなる。
相互モニタリング場面の設定	・直前の話し合いが協同的ではあるものの目的とのズレが生じてきていたグループでは，相互モニタリング活動は〈目的を意識して進める〉や〈共通点と相違点を見つける〉の発揮に影響を及ぼす。 ・直前に論争的会話に陥っていると効果は薄くなる。

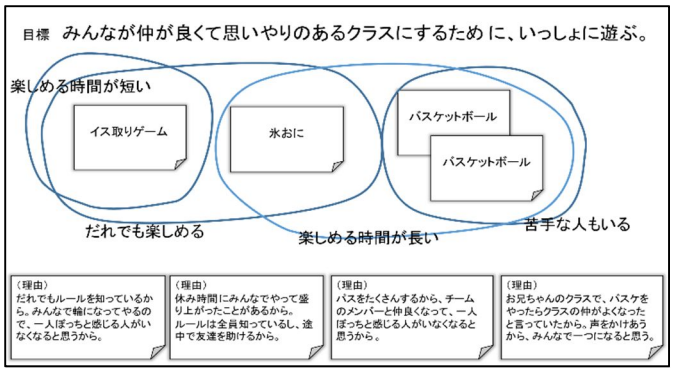

図3　話し合いの可視化シート

(2)-3　新たな実践の開発と効果検証

上述の明らかになった指導の要点を生かし，小学３年生が話し合いの目的やプロセスを意識しながら話し合うことができるようにするための実践を開発し，実証的方法で効果を分析した。話題は「新 1 年生が学校が楽しみになるように紹介する附属小学校のよいところを班で話し合って決める」とし，過度に自分の意見に対する思いが強くならないように配慮した。また，話し合いモデルや話し合いシートを活用するとともに，話し合いのプロセスを分節化・カード化して作成した「プロセスカード」（北川,2023）を活用した。この「プロセスカード」は，グループごとのホワイトボードに掲示したり，イーゼルに立てかけたりすることで参加者全員が常に見られる環境を設定した。加えて，単元内に複数の話し合い活動と振り返り活動の場面を設定することで，プロセスの理解を深められるようにし，必要に応じて自分たちの工夫を取り入れられるようにした。これらの手立てを取り入れて実践した結果，「プロセスカード」を取り入れることにより，話し合いのプロセスに関する発言の回数，発話者数ともに有意な増加が見られた。また，話し合いプロセスの計画に関する知識・理解についても実践前・後で大幅な向上が見られた。さらに，質問紙調査の結果からは，「協同性」「目的意識」「展開意識」「推進」に関する項目で向上したと回答する児童が９割を超えており，児童が話し合う力の高まりを実感していたことも明らかになった。北川(2023)では活用方法にも論及し，カードをめくっていく方法よりもホワイトボード等に一覧で示す方法の方がより高い効果が得られたことが実証された。

図4　「プロセスカード」の活用

(3)「小学校６年間を対象とした議論展開力を育成するためのモデル」の検討

本研究で実証的に明らかになった内容と北川(2018)の内容とを整合性を確認し，一貫した育成モデルとなるように接続を明確にする作業を行った。議論を展開するためには，「中心的な展開スキル」に加えて「メタ認知」「プロセスに関する知識」も不可欠であることから，それらについても系統性を重視しながら発達に応じた内容を位置づけていった。また，それぞれの段階での指導の要点も示すことで，実践開発に生かしやすいようにした。作成した育成モデルが以下の表である。

	指導の要点	議論展開力及び素地的能力		
		中心的な展開スキル	メタ認知	プロセスに関する知識
低学年	話し合うことの楽しさ・よさを実感し，協同性を高める。 ＊能動的に聞く ＊一往復のやりとりの連続を意識し，話をつなげる	・共感的な反応を返す ・メタ言語を使用し，つなげて話す ・質問や問いかけをし，応答し合う	話をつなげる意識をもち，つながる楽しさ・よさを味わう	一往復のやりとり（受けて返す）の連続

中学年	グループで自律的・協同的に話し合いを進める基礎を養う。 ＊自分の意見を「対象化」する ＊「枠組み」レベルの目的を意識しながら話し合う	・目的を意識して話し合う ・自分の意見も対象の一つとしながら，複数を並べて比較する	目的に沿って進めたり発言したりすることを意識の中心におく	話し合いの「はじめ・中・終わり」といった簡単な手順意識　／途中で出された意見を確認するメリット　／話し合いのゴールと進め方の違い（拡散・収束）
高学年	異なる立場でも尊重し合いながら，協同探究をめざす。 ＊状況への認知を高め，場への参入と俯瞰とを行き来する ＊異質な考えを整理し，議論を「組織化」する	・全体的な参加状況や意見の偏りにも目配りしはたらきかける ・意見を整理したり，新たな論点を出し合ったりしながら議論を深めていく	状況を俯瞰してモニタリングする　（議論の進み具合・偏り，参加者間の発言の偏り等を複合的に捉える）	討論の第一の目標（利点と課題の共有）と第二の目標（一致点）の理解／議論進行の大枠の定着と，局所でのバリエーションの増加　／討論以外の話し合いにおける効果的な進め方のパターンの増加

（4）今後の展望

①話し合いプロセスの進行中における即応的な対応について考察し，実践の開発・検証に取り組むことである。小学校高学年から中学校を対象に検討を進めていきたい。

②意見を整理する場面については，想定される活動が国語科教育内でも統一されていない。そのため，発達に応じた活動の検討やそれに基づく系統的な指導モデルの開発・評価も喫緊の課題だと考える。教科書や実践事例に基づく現状分析，具体的な指導方法の開発・検証に取り組んでいきたい。

〈文献一覧〉

北川雅浩(2014)「協働探究を志向した討論力の育成」『月刊国語教育研究』505 号,50‐57.

北川雅浩(2016)　「小学校段階で討論を円滑に導入する方法の検討」『国語科教育』79 号，23-30.

北川雅浩(2018A)　「小学校段階における討論学習の必要性の再検討―認知面と心理面への影響の分析を通して―」『国語科教育』,83 号，15-23.

北川雅浩(2018B)「自律的な討論の実現に向けた指導に関する一考察―小学校段階における〈議論展開能力〉の育成を中心に―」『国語科教育』,84 号，40-48.

北川雅浩(2020)「小学校 2 年生の話し合い指導の要点についての検討　―同一話題による２年生と３年生のグループディスカッションの比較を通して―」『熊本大学教育学部紀要』69 号，1-8.

北川雅浩(2021)「小学校中学年段階での話し合いを展開する力の育成に関する検討」『熊本大学教育学部紀要』70 号，1-8.

北川雅浩(2022)「話し合いを展開する力の活用を促す指導の要件の検討」『熊本大学教育実践研究』39 号，25-32.

北川雅浩(2023)「話し合いプロセスの共有方法の違いが話し合いの進行にどう影響するか―小学校３年生を対象とした調査実践の分析をもとに―」『全国大学国語教育学会　国語科教育研究　第 144 回島根大会発表要旨集』,208-210.

山元悦子(2016)『発達モデルに依拠した言語コミュニケーション能力育成のための実践開発と評価』　渓水社

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 北川雅浩	４．巻 70
２．論文標題 小学校中学年段階での話し合いを展開する力の育成に関する検討	５．発行年 2021年
３．雑誌名 熊本大学教育学部紀要	６．最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 北川雅浩	４．巻 39
２．論文標題 話し合いを展開する力の活用を促す指導の要件の検討 ： 小学校４年生を対象とした実践からの導出	５．発行年 2022年
３．雑誌名 熊本大学教育実践研究	６．最初と最後の頁 25-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 北川雅浩	４．巻 1016
２．論文標題 フロントライン教育研究 討論を通して考え合うための〈議論展開能力〉の育成	５．発行年 2022年
３．雑誌名 初等教育資料	６．最初と最後の頁 80-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 北川雅浩	４．巻 69
２．論文標題 小学校2年生の話し合い指導の要点についての検討 ―同一話題による２年生と３年生のグループディスカッションの比較を通して―	５．発行年 2020年
３．雑誌名 熊本大学教育学部紀要	６．最初と最後の頁 1，8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 北川雅浩	4．巻 58
2．論文標題 成人のグループディスカッションにおける「話をつなぐ」行為の実態調査―小学校での指導内容の検討に向けて―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 国語国文 教育と研究	6．最初と最後の頁 6，20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 北川雅浩	4．巻 68
2．論文標題 小学校のグループディスカッションにおいて「問うこと」はどのように機能しているか	5．発行年 2019年
3．雑誌名 熊本大学教育学部紀要	6．最初と最後の頁 1，8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 北川雅浩
2．発表標題 話し合い指導における議論プロセスへの意識についての検討
3．学会等名 全国大学国語教育学会
4．発表年 2021年

1．発表者名 北川雅浩
2．発表標題 小学校段階で育成すべき議論を展開する力の検討
3．学会等名 熊本大学教育学部国文学会
4．発表年 2020年

１．発表者名 北川雅浩
２．発表標題 グループディスカッションにおける「話をつなぐ」行為の実態調査①
３．学会等名 全国大学国語教育学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 北川雅浩
２．発表標題 話し合いプロセスの共有方法の違いが話し合いの進行にどう影響するか
３．学会等名 全国大学国語教育学会
４．発表年 2023年

１．発表者名 北川雅浩
２．発表標題 立場を保留して取り組む討論についての検討　―大学生への実践分析をもとに―
３．学会等名 全国大学国語教育学会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計1件

１．著者名 ジェフ・ズィヤーズ、北川雅浩、竜田徹、吉田新一郎	４．発行年 2021年
２．出版社 新評論	５．総ページ数 312
３．書名 学習会話を育む	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関